

2019.1 改訂

政治学

公務員試験専門 喜治塾

<目次>

I	政治学の基礎理論	
1	近代と現代	1
2	政治権力	4
3	政治的リーダーシップ	13
4	国家論	16
5	現代政治学の基礎理論	18
II	政治思想とイデオロギー	
1	政治思想の変遷	22
2	自由主義と民主主義	26
3	イデオロギー	45
III	マクロ理論	
1	政党	49
2	圧力団体	57
3	マスコミ	64
IV	ミクロ理論	
1	政治意識	69
2	政治的無関心	72
3	投票行動	74
4	意思決定論	76
V	現代の政治制度	
1	統治の基本的枠組み	77
2	各国の政治制度	79
3	議会制度	85
4	選挙制度	88
5	各国の選挙制度	92

序 政治とは何か

政治＝集団が成員全体を拘束する決定を行う作用

Q：何故政治が必要なのか？

→集団が所有する有限の財産を配分する必要があるため。配分が滞れば集団は崩壊する。

ex. 「政治＝価値の権威的配分」（イーストン）

Q：何故政治には「悪」「汚い」というイメージがつきまとうのか？

→有限の財産の配分を巡って争いが生じるから。すなわち、悪いのは人間であって政治ではない。人間の利己心が政治を墮落させ、逆に公共心（利他心）が政治を崇高にする。

Q：政治と権力とはどのように関係しているのか？

→下された決定に対して成員を強制的に従わせる力、が権力である。自らの意志で他者を支配し、かつ自己に有利な利益の配分を得たければ、権力を獲得するしかない。ここから権力闘争が発生する。 ex. 「政治は階級闘争である」（マルクス）

< 実例・従来の日本の政治システムとその問題点 >

- ・利益誘導システムの構築 → 集票・資金提供の見返りに諸団体に利益を配分 → 政治腐敗の温床
- ・大口献金者である財界を優先した経済成長政策 → 生活関連社会資本整備の立ち後れ
- ・族議員の台頭（政高官低現象）、国対政治の定着 → 議会政治の形骸化 → 国民を疎外した密室政治

I 政治学の基礎理論

1 近代と現代

(1) 近代社会から現代社会へ

絶対主義 (16~18c)

□と□による強大な国家権力



富裕な資本家階級（市民層）の不满 ← 政治的発言力なし



経済的自由なし（重税等）

近代市民革命 → 絶対主義の打倒 → 近代社会の成立

近代社会 (18~19c)

国家の役割：市民の財産を守るのに必要最小限の軍事・警察力（□国家）

自由な経済活動（資本家の経済的自由）の保障



□社会の発展 → 資本主義の発達



農村から都市への人口流入 → 劣悪な住環境 都市問題

資本家による搾取 → 貧富の格差拡大・不平等 社会問題

世界恐慌 → 大量失業 の発生



階級間（資本家vs労働者）の対立激化 → 社会主義の台頭

労働者による政治的自由獲得闘争の激化



選挙権の拡大 → 普通選挙の実現

現代社会 (20c~)

□社会の出現 ← マス・メディアの発達

大衆の政治的影響力増大 → 大衆の要求が政治に流入（大衆民主主義 = マスデモクラシー）

社会問題解決のため国家の国民生活への介入が求められる（積極国家、福祉国家）

(2) 近代国家と現代国家の比較

	近代国家 (18~9C)	現代国家 (20C~)
選挙制度	選挙	選挙
経済体制	初期資本主義	高度資本主義
経済政策	自由放任主義経済 スミス	計画経済・管理経済 ケインズ
社会	社会 ←同質社会	社会 ←異質社会
人間像 (政治の担 い手)	財産と教養のある市民 理性的・合理的人間 志向型人間 (能動的) ※1	バラバラで砂のような大衆 (原子化) 感情的・非合理的人間 志向型人間 (受動的) ※1
国家観	消極国家 夜警国家 (※2) 国家	積極国家 福祉国家 (※3) 国家
政治制度	三権分立 中心主義	の肥大化 の形骸化
政府形態	チーフ・ガバメント	ビッグ・ガバメント

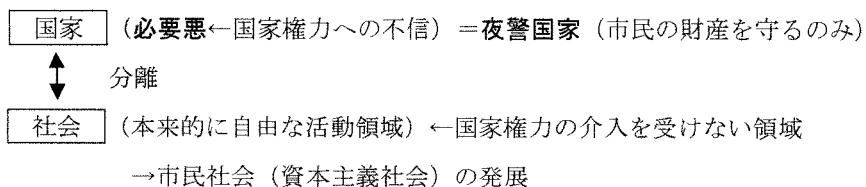
※1：リースマンの造語

※2：ラッサールの造語 cf. 警察国家：絶対主義国家が富国強兵のために推進した国家

※3：現代福祉国家の問題点

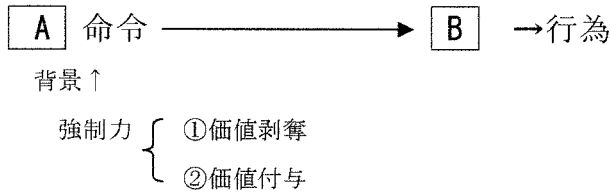
- | | |
|----------------|-----------------|
| ①管理社会の進行 | →目に見えない所での自由の侵害 |
| ②国民の国家への依存心の増大 | →国民の自発性や自助の精神低下 |
| ③行政コストの増大 | →財政赤字の慢性化 |

(国家と社会の分離)



2 政治権力

(1) 権力とは 意義：個人の意図に訴え、その行動を変えるもの



(2) 権力観

	実体概念 (権力観)	関係概念 (権力観)
意義	権力者が何らかの価値ないし能力を有するがゆえに権力を有するとする考え方	服従者が権力と感じ、それを認めるところに権力が成立するとする考え方
	◎権力者 ◆強制力 ↓ 一方的支配 ↓ ○服従者	◎権力者 命令 ↓ 相互関係 ↑ 合意 ○服従者
論者	マキャベリ (伊・思想家) ホッブス (英・政治思想家) マルクス (独・哲学者) ラズウェル (米・政治学者)	ロック (英・政治思想家) ダール (米・政治学者)

※ラズウェル：ある人間が他の人間の持つ価値を剥奪する能力を有する時、権力関係が成立する。

権力基底 (=権力行使の基盤となるもの) の多元性想定→多元論

※ダール：Bの行った行為の要因にAがなっているとき、AはBに権力を行使したとする

(3) 権力の零和概念と非零和概念

提唱者：パーソンズ（米・社会学者）

～政治権力の社会的効用を重視

零和概念：政治権力が服従者の利益の収奪によって成立しているという従来からの権力観

政治権力＝必要悪 → 政治権力の制御が必要

権力観と結びつく

↓

非零和概念：政治権力が社会全体としてはプラスの利益を生んでいるという新たな権力観

政治権力＝目標達成のために社会的資源を動員する能力 と定義される

(4) 1次元的・2次元的・3次元的権力観（ルークス）

1次元的権力観（ダールら）：アクターの行動に焦点を合わせた従来からの権力観

2次元的権力観（バクラックとバラッツ）：非決定という形で阻止的に権力が行使される点に着目

3次元的権力観（ルークス）：当人に意識されることすらないかたちで行使される権力に着目

(5) 政治権力の正当性

意義： 権力者が権力を持ち、その権力を行使することが正しいと服従する者から認められること

政治権力の特徴 {
 ↓ {
 ・ 強大な強制力（警察、軍隊）により実効性が担保
 ・ 範囲が広範で領土内全体に及ぶ

安定のためには、支配の が必要 ← だけでは維持コストがかかりすぎ、

かつ被支配者の反発を招く

権力 → にまで高まれば支配は安定 権力： 的服従

↓ ← 正当化

権威： 的服従

■ ウェーバー（独・社会学者）による権力の正当化根拠の分類（支配の三類型）

	伝統的支配	法的支配	カリスマ的支配
内容	伝統的権威による支配	一定の手続で成立した法（制度）による支配	支配者の超人間的な資質による支配
特徴	変化への適応困難	最も合理的な支配形態	短期的に効果が上がるが長続きしない
例	前近代社会、開発途上国	近現代国家、官僚制	ナポレオン、ヒトラー

■ メリアム（米・政治学者）による象徴形式（＝権力正当化の手段）の分類

	感情・情動に働きかける象徴	理性に働きかける象徴
内容	感情・情動に働きかける象徴	理性に働きかける象徴
特徴	視覚・聴覚にうったえる	言葉による説得
例	国旗、国家、パレード、立派な建物	イデオロギー

※現代大衆国家では為政者にとって の重要性が高まる。

(6) 権力の構造 (エリート論)

～少数者支配の現実を明らかにし、民主主義の多数者支配神話を打破

① の鉄則

意義: 人間が作るあらゆる団体は支配の必要性から必然的に少数支配の形式を取る

(←組織の円滑な運営と効率的な目的遂行)

■ (独) 『現代民主主義における政党社会学』 (1911)

→独・伊の社会民主党の実体研究から実証

組織の肥大化と共にデモクラシーは衰退していく

② エリート (選良) 理論 ←大衆の自己統治能力に対する疑念

エリートとは

意義: 知識・技能・地位などで優越し、社会の各領域において意思決定を独占する少数の人々

⇔ 大衆

■ モスカ (伊・政治学者)

→民主主義の多数支配は単なる擬制に過ぎないことを指摘

■ パレート (伊・経済学者) ～ 論

→エリートの循環により、社会変化と再均衡が自然に達成される (楽観論)

■ シュンペーター (奥・経済学者) 『資本主義・社会主義・民主主義』 (1942)

民主主義=決定を行う人々の選挙が第一義的で、選挙民による政策決定は二義的

③ [] ・ エリート

意義： 現実に存在する強大な政治的権力の保持者

■ [] (1916-62米・社会学者) ←①の鉄則を国家に適用

→1950年代アメリカの政治権力構造を分析し、一部の者への権力集中を指摘

→ [] が相互に緊密に結びつきながら支配集団を形成
(官軍産複合体)

cf. 三角同盟 (政財官の日本版パワーエリート)

④ [] 的エリート論

意義： 政治権力は諸集団に分散し多元的に存在しているとする理論

■ [] (1915~2014 米・政治学者) 『誰が統治するのか』 (1961) ←多元主義
コネチカット州ニューヘブンの権力構造を 争点法 を用いて実証研究

↓

政治的決定への影響力は多数のエリートに分散

→分野毎に多様なエリートが政治的影響力を行使

⇔cf. ハンター：アトランタの権力構造を 声価法 を用いて実証研究

→少数の実業家が政策決定の影響力を独占

■コーンハウザー（1925～2004・米・社会学者）

大衆社会論～『大衆社会の政治』（1961）

		非エリートに対する操縦可能性	
		低い	高い
エリートへの 接近可能性	高い	多元的社会	大衆社会
	低い	共同体社会	全体主義社会

大衆社会の問題点は非エリートの操縦可能性が高い点にある
→多元的社会が望ましい